C. shoot of Photo engraving and Lithography や独逸の Charten berg [Schartenbergカ] にある Technische Hocho-Shule [Hochschuleカ] や、最後に墺国 Wien にある K. K. Graphishen Lehr-U-Versuchs-Anstaet für [Graphischen Lehre-u-Versuchs Anstaltカ] Photographie und Reproduktion techinch [Technik] を巡歴し最後の Wien の学校では約半年間程、Eder 先生および Valenta 先生の指導の下で感光色素のことや写真乳剤製造のことを主として研究して、大正十一年三月に帰朝した。もちろん、これ等諸国の写真や印刷に関する研究所や実工場も多数見せてもらった。

芝浦に高等工芸学校を新設し、臨時写真科をそこへ移転させることは鎌田が留学する前に内定していた。したがって、帰国後暫くして鎌田をはじめ職員、施設がそっくり移転してしまったので、この留学の成果は本校ではほとんど生かされなかった。

⑩ 東台彫塑会と朝倉文夫

大正八年十一月六日、本校彫刻科を卒業した官展花形作家たちが中心となって東台彫塑会を結成した。同年同月五日の『万朝報』は次のように伝えている。

○東臺彫塑會
――斯界の花形を網羅す

東京美術學校出身の青年彫塑家連を一團とした東臺彫塑會は、六日午後六時から上野精養軒に發會式を擧げる、顔觸は石川確治、井上久繼、新田藤太郎、小倉右一郎、大國貞藏、片岡角太郎、吉田三郎、内藤伸、矢野誠一、桝澤清、藤川勇造、幸崎伊次郎、朝倉文夫、齋藤素巖、笹野惠三、島村治文、日名子實三、關野夷雲[聖]の十八氏、先づ彫刻界の花形を網羅したといつても可い、毎年一回展覧會を開いて作品を發表する計畫もあり、青年實業家田鍋一二氏が後援者として經濟方面を擔任すると云ふ　會員の一人石川確治氏は曰く『恁う云ふ團體は反抗的に成立するものゝやうに思はれる場合が多いが、此會は全くそれとは違ひ、殊に有力家の後援もあり、幸福に發達することと思ひます』

同会は大正十年の第一回展、同十二年の第二回展、同十四年の第三回展のほか、同十四年七月十七日に解散するまでに大阪市で二回、福岡市で二回、佐世保市で一回、熊本市で一回展覧会を開き、本校彫刻科卒業生の制作向上を助け、わが国彫塑界の中心勢力と目れた。

東台彫塑会は上記のメンバーの合議により成立した会であるが、次第に朝倉文夫以下数名が牛耳をとるようになった。帝展審査をめぐって内紛が起こり、解散に至るが、それも朝倉の独断で決定した。朝倉は銅像作家の渡辺長男(明治三十二年本校卒業。岡崎雪声の女婿)の実弟で明治四十年本校彫刻科卒業。同四十二年研究科を終了した。その前年の第二回文展に「闇」を出品して二等賞を獲得し、一躍名を知られるようになり、その後も引続き第三回文展で「山から来た男」が三等賞、第四回文展で「墓守」が二等賞、第五回文展で「土人の顔」が三等賞、第六回文展で「若き日のかげ」が三等賞、第七回文展で「含羞」が二等賞、第八回文展で「いづみ」が二等賞と、立て続けに高位の賞を獲得し、大正五年の第十回文展より審査委員となり、同八年九月、帝展審査委員となった。大正七年六月および

同八年六月には有志とともに蕃土拉舎彫塑展覧会も開いている。その活躍ぶりはめざましく、特に東台彫塑会結成後は彫刻界における新勢力の頭領として重きをなした。大正十年五月には本校教授に任命される。

大正期に入り、文展彫刻部門は大きな転換期を迎えた。朝倉をはじめ、本校を卒業した新しい世代の彫刻家たちが実力をつけ、これまで審査委員として君臨してきた古老たちにとって替りはじめる。この新しい動きは一つには大正五年の本校改革運動の一促進力となり、次いで大正九年、十年ごろの本校彫刻科指導陣の交替という結果を生むのである。

この転換期にあっては、新旧の対立のみならず、例えば東台彫会と曠原社（大正十年結成）の反目のように、若い世代の間でも対立抗争が続いたが、それについては泉川欣二が「大正期彫刻界の紛争と朝倉文夫の地位」（『美之国』第三巻第三号。昭和二年四月）にわかり易く次のように解説している。

大正年間に於ける彫刻部狀勢は、その初年度に於ては文展創立當時とおなじく始（発）ど舊人の舞臺であつた。即ち、第六回（大正元年）の審査員としては、石川光明、大熊氏廣、米原雲海、竹内久一、長沼守敬、山崎朝雲、白井雨山、新海竹太郎の八氏に高村光雲が主任として控へてゐるといふ陣立てだ。併し、一般の出陳作品は僅か三十五點に過ぎなかつた。この間、出品作家中で特色あり三等賞以上の成績を得たのは朝倉文夫氏を最としこの人ばかり明治四十一年の第二回文展に夙く貳等賞を贏（か）ち得たのを始めとし、二等三等、二等、三等、二等といふ風に拔群の出來榮えを示してゐる。建畠大夢〔明治四十四年東京美術学校卒〕藤井浩祐〔同四十年同〕の二氏もこれに次ぐ成績を示した。

大正二年の文展には、石川光明氏が歿し、三年の第八回には、朝倉氏の二等賞が筆頭に藤井、建畠氏の外、三等賞として小倉右一郎〔明治四十年東京美術学校卒〕北村四海氏等が擡頭した。四年の第九回も大した變化なかつたが、藤井氏はこの以後再興院展に走り爾後、美術院にも彫刻部が出來て平櫛田中、吉田白嶺、佐藤朝山、内藤伸〔明治三十七年東京美術学校卒〕及び藤井氏等がその中心として活躍した。

第十回即ち、大正五年に至り、文展彫刻部も面目を改め、竹内久一氏は病歿し八回以來大熊氏は止めた後へ、新たに朝倉、北村の二新人が出、森林太郎氏が高村翁に代つて主任となつた。この事は、文展彫刻部の歴史の上からは可なり重視される性質のものだ。何となれば、それ迄は高村氏以下所謂元老または老朽審査員が多かつたので、朝倉氏一枚を加へただけでも確かに大改革に違ひなかつた。それ迄の彫刻部審査員の保守思想がどんなに堅牢であつたかといふ事は、文展にも海外留學の機會が出來、和田三造氏は西洋畫から最初に推されて洋行したのだがその次に彫刻部から朝倉氏が出される順になると、當然大欣びすべき筈の彫刻部審査員の人々が、『まだその時期でない』とか何とかで阻んで了つたといふエピソードに依つても察知されよう。

斯くて、朝倉、北村兩氏は舊勢力に相對抗する場合となつたが、この間にも元老連の威壓は容易に去らず、むしろ朝倉氏は孤立の感があつたと聞く。が、それこれに關せず、大正六年十一回文展には北村西望〔明治四十五年東京美術学校卒〕、建畠大夢、

小倉右一郎の三氏が推薦された。次いで十二回文展には、堀進二、齋藤素巖、〔明治四十五年東京美術学校卒〕、池田勇八〔同四十年同〕、長谷川榮作、北村正信、吉田三郎〔同四十五年同〕の六新人が特選されるなど、時代の進運も窺はれるが、朝倉氏審査員となつてからの活躍ぶりは愈々鮮やかになつて來た。併し、ここに至るまでには、彫刻界の新舊勢力の爭ひも益々顯著になつたので、現に大正七年四月には、朝倉文夫氏を筆頭に、小倉、北村西望、内藤伸、石川確治〔明治三十八年東京美術学校卒〕氏等の新進が、『蠻土拉〔バンドラ〕社』を創立し、自づから新人の舞臺となつた。尤も、これは、さういふ意味よりも彫刻の普及、小品展といふが目的だつたので最初は新海竹太郎氏等の元老も加はつてゐたのを感情の行違ひで自然離れて了つたのらしい。

大正八年、文展が帝國美術院と改まるに至り、新審査員として北村西望、建畠大夢氏等入り、元老卽ち會員となつた高村光雲、新海竹太郎氏は退いて後見役に廻つた。それでこの度こそ新舊勢力の均分が出來たわけであるが、朝倉氏はやはり他の人々によつて孤立の地位に立たされたかの觀あつた。第二回には、内藤伸氏、第三回には堀進二、池田勇八氏審査員となつた。卽ち、大勢の趨くところ極めて自然であつたが、内藤氏を除く他の人々は結束して反朝倉の態度に出たのである。その理由とする所は朝倉は横暴だからといふのである。これは數の上から云つても變なもので、一方は二人に對し他方は七八人の結束でその中の一人が横暴で仕方ないから脫會すると迄意氣込んだのは一奇と云へよう。これには、院長の森鷗外博士も呆れ返つて罷める者は罷めよの態度に出たので却つて事なく濟んだらしい。第三回までこの類の爭覇は止まなかつた。

一方、朝倉氏は、斯やうな傾向の新人を導くに不適切なのを覺り、自ら率先して『東臺彫塑會』を起し、小倉、齋藤、石川氏等東京美術學校出身の錚々たる人々を中心に彫塑界に於ける一大結社を作り、以て技を錬る事と彫刻界の刷新とを期したのである。そして帝展審査議會などにも調和的に向ふつもりらしかつたが他方では、新海、高村、山崎、北村、〔ママ〕四海、米原氏等を後楯に、北村西望、建畠兩氏、これに池田勇八氏など中心又參謀となつて、別に『曠原社』なるものを作つたので、東臺彫塑會と曠原社は正に拮抗するに至つた。この頃が彫刻界紛爭の極點であつたと云へよう。〔下略〕

⑪ 工芸美術会（新興美術会）

明治末期に始まった工芸の官展併置運動は大正八年、帝国美術院設置を契機として活発化する。同年、国民美術協会による帝展への工芸参加要請書提出、装飾美術家協会の誕生に続いて、十一月十一日に本校出身の工芸美術家による組織、工芸美術会が成立する。工芸美術会は、正式名称を新興美術会とし、規則書とともに次の趣意書を発表した。

◎新興美術會趣意書

大戰の終熄は玆に一變して世界改造の氣運を打開し來る　此時に當りて吾人工藝美術に從事するもの亦偸安姑息以て足れりとす可きに非るなり　顧ふに明治時代に於ける工藝美術は稍其世運の進展に伴ひ光華燦然たるものありしかと幕末墮落の宿弊を受けて所